

# 風土



白鳥

神蔵器

城太郎に会ふ臘梅を心あて

冬の鴉ふところに秘す「山家集」

神田川継目を見せず去年今年

左手を右手のつかむ初寢覚

モジリアニの女ひとふりかへる十二月

法 金 剛 院 青 女 の 滝 の 冬 桜

寒 鯉 の 動 か ね ば 水 氷 ら れ ず

新宿御苑 三句

松 過 ぎ て を り 百 年 の 大 木 戸 門

大 寒 や メ タ セ コ イ ア の 炎 立 つ

モ ー ツ ア ル ト の 真 白 き 一 花 冬 薔 薇

鶴 鴿 の 乗 つ て 薄 氷 刃 な す

白 鳥 来 る 男 晴 れ し て 杉 並 区



# 竹間集

同人作品



雪の夜の

南 うみを

横走る雪に屈みて菜を引けり  
雪掘つて菜はさみどりの雫かな  
新聞紙ぬらして包む寒の鯉  
鯉を煮る玻璃戸に雪の吹きあたり  
注連売りのまはりの雪の踏み荒れて  
雪の夜の瓶の中なる帆掛け船  
雪しづり夢より覚めし山のこゑ

冬 桜

島谷 征良

葱畑に火星大きく輝けり  
かはたれの雨となりけり桂郎忌  
芭蕉忌や椈の梢を雲の影  
医者替へて効き目のうすき風邪薬  
秋深し城を真中に町さびれ  
わが昔着し外套や子に似合ふ  
冬桜一枝は日ざしとらへけり

冬の鶏

大竹 淑子

馨かね子ねを打つ危坐にとどけり冬日影  
音羽なる舞台に冬日あまね遍しや  
滝水の流れはつかに冬紅葉  
石仏の面輪幽けし冬日和  
冬の鴟阿あて弓流い為れ・母禮もれの碑の昺り  
いかづちかづちの神の庭なり芝枯るる  
寒さむ禽のの杜のとなりたり水流れ

追 憶

— 小野寺節子 —

十二月八日の白湯のあまかりき  
これからを生き甲斐とせむ返り花  
追憶の瞼重たし雪しぐれ  
桂郎を知らぬ男の懐手  
年移りゆく桂郎の古手紙  
桂郎を待つて熱爛さめちやつた  
雪降るや憶ふは佐渡の流人墓  
佐渡恋し師の句集名「波の花」  
貧しさの世をなつかしみ麦を蒔く  
普段着の老尼の素顔山茶花散る

雛僧の丸いくるぶし目の寒し  
美しく老いゆく同志明日の春  
ひとり居の良くも悪くも冬至風呂  
蕪むし老いの唄へる数へ唄  
雪虫がみてる嗽ののどぼとけ  
数へ日や胸乳に当てる聴診器  
ともかく庖丁みがき年用意  
眉つくるそれも女の春仕度  
生きてゐるものの声音や凍渡  
風花におくる言葉のありやなし

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

木に花を咲かせて雪や賤ヶ岳  
マツチの火水に沈めし十二月  
十二月第九を歌ふ口口口

杉本葉子

短日や胎内めぐりの数珠の冷え  
短日や日の逃げやすき茶碗坂  
冬芽固き醍醐の太閤桜かな

祭殿をはみ出す大矢大旦  
元日や白壁白き犬山城

岐阜新郷社

柴田久子

一つ火の闇を動かす隙間風  
雪催世間知らずの犬とみて  
ちちとははの愛は労り冬薔薇  
年の瀬の厨に叩くふくらはぎ  
トリノより聖菓届きて二人かな

安永圭子

ポケットの底のはるかや着ぶくれて  
冬灯をんなが仕切る魚市場  
冬襖開ければ匂ひ立つ歴史  
一生涯海鼠嫌ひで通しけり  
着ぶくれて着ぶくれの子を抱きしめぬ

近藤幸三郎

国引の出雲や戸毎干菜吊り  
師の欲さるるものに紙子や冴えまさり

橋添やよひ

修羅能の笛の高音や去年今年  
火の島の蒼く暮れゆく小春かな  
時雨るるや夜の屋台にギター弾き  
落し蓋噴き上げ寒鰯煮あがりぬ  
家土産に脚むらさきの鱧場蟹

# 風土独語／神蔵 器



マッチの火水に沈めし十二月

杉本薬王子

この句はご自宅、お母さんの仏壇の前である。「私がアリセプト（痲呆を遅延させる画期的な新薬）を作るきっかけは、母が痲呆になってしまったことが大きい。中略。母は苦勞の連続でした。何とか母を治したいという思いが、薬の開発への熱意につながったんですね」と薬王子さんは語っている。この新薬の成功により英国ガリアン賞特別賞、恩賜発明賞、日本薬学会技術賞など多くの賞を受賞されたが、お母さんが新薬の成功を待たずに他界されてしまったことは痛恨のことであった。また昨年は作者自身大腸癌の手術という大変な事態になった。剣道七段という体力と精神力がこうした苦難を乗り越えた。そして再び多忙な毎日を送る十二月である。

仏壇には昔ながらの大形の徳用マッチと手前の方にコップのうなガラス器の水差が置いてある。蠟燭に火を点し、マッチの火を水に差すとジューンとかすかな水煙りを上げ香をたてて火が消えてゆく。すべての想念が一瞬にして雲散霧消する。仏を拝し、亡き人を拝することは、亡き人のためであるが、本当に功德を得るのはお参りする人の方であろう。作者は静かに今日あることを喜び、生きる新しい力が湧いて来たのではなからうか。

一つ火の闇を動かす隙間風

安永 圭子

別時念仏の庄巻はコツ火の法要である。念仏の合唱が止むと一切の灯火が次々と消され真の暗黒となる。それまで輝いていた金欄の祭壇、十二光仏、報土・後灯の僧たちも、膝がふれ合っているほど近い隣の人すら見えない。何千人か沢山の人が詰めかけているのに話し声はおろか咳一つ聞えない。あの世か、未法の世を現わしている演出だと思いつつも、暗黒という暗さに心細く、自分で自分の手を握ってみたりした。

その時、その闇の暗黒の中に火打石の音がし、火花がぱつと飛び散った。思わず息のみ、凝視していると、一瞬の火花は用意された火口に受けられたようで、火口の火は摺り木に転火されると急に隙間風が来、闇を動かしてまだ幼い炎をなびかせた。もしこの火打の僧が一打で火をつけられなかった時は、唐傘一本だけ与えられて寺を追われると聞いていた。少しの隙間風でも気がではなかった。

灯が無事に点火されると、ほとんど同時に再び引声念仏が低く静かに起り、ほどなく本堂全体のすべての灯が点り、人々は再び明るさを取り戻す。念仏は堂をゆるがし最高潮に達する。

遊行の一つ火が、念仏によって復活された菩提の火であれば、この句の隙間風は、吾人の心の煩惱の隙間風であろう。

ポケットの底のはるかや着ぶくれて

柴田 久子

「着ぶくれ」というと、どこかおかしみがあり愛敬があるが、



掲出句は着ぶくれていて、ポケットの底になかなか手が届かないほどはるかに遠くなつてしまつたという。滑稽もここまでになると笑つた後に何故か涙がにじんで来る。

寒夕焼俑のごとくに墓石佇つ 直井たつろ

俑は中国で副葬品として用いられた人間を模した像である。土・木・金属・陶などで作る。

私はかつて西安郊外の秦始皇帝兵马俑坑博物館を見学したことがあつた。これは始皇帝が死後始皇帝陵を護衛するために造られた大地下の軍隊で最前列に一列七十二人の兵士が三列横隊をなし、その後には横四十人の歩兵、騎兵、戦車などがつづく。現在もおお発掘中でおよそ八千体にのぼる規模ではないかと推定されている。

ところで掲出句であるが、どこか大きな霊園が想像される。ほとんど等身大の墓石が何列何号と整然と並んでいる。寒夕焼は驚くほど赤く西空に燃え照り輝き、大地まで明るく染めている。しかし、墓石にはすべて逆光である。墓石は一様に薄暗く、同じような高さ、そして音一つなく凍りついたようにびくとも動かない。あたかも始皇帝陵の護衛の武装した兵士のように、眼前の墓石も作られた俑のごとく、生氣というものを全く感ぜられない。寒夕焼はめつたに見られないが、どうかすると淋しいが冴えた赤色を見せることがある。寒夕焼が美しければ美しいほど、俑のごとく佇つ墓石は無気味である。

鯉揚げてあとは手で搔く蝦諸子 浅田 光代

京の広沢池である。広沢池では毎年十二月七日から一週間ほど池を干して鯉揚げが行われる。業者ばかりでなく近くの住民や観光客まで集まつて来るので、目ぼしい獲物ははじめの二日か三日とのことである。

鯉揚げは初めに先ず水を落として、出来るだけ水を浅くしてから、網で鯉を片寄せ、箆や箕などそれぞれ得物をもつて掬い取る。水がさらに少なくなると手掴みに楽しんだりする人も出て来るが、鯉が居なくなると後は手で底を搔くようにして蝦や諸子捕える。広沢池は琵琶湖と水がつながっているのか、放流してあるのか、本諸子がかかり居るようだ。自分で諸子を獲ろうとすれば、泥だらけになつて水を搔くことを覚悟しなければならない。冬の諸子は絶品である。

十二月立つてる夫を使ひけり 横田 晶子

「立つて居るものは親でも使え」というのが元の格言である。これは急ぐ用事には、誰でもよい、手近に立つて居る人に用を頼むのが早くて工合がよい、ぐらゐの意味である。この格言の「親」は目上の人、尊敬しなければならぬ人の象徴として使われている。子が親を使うのが当り前の世の中ではこの格言もはや意味をなさない。

作者は十二月の多忙の折、たまたま近くに立つておられたご主人に用を頼んだのだ。これは仲の良いご夫妻。かえつてほばえましい。

# 風土集



## 神蔵器選

川一筋寺領に走り年詰る 京都 橋添やよひ

蓮月の籠りし庵ぞ笹子鳴く

沖へ雨逸らす豆稲架与謝郡

機音の冴ゆる丹後や絹の道

しやぶしやぶの蟹に華咲く十二月

鯉揚げてあとは手で搔く蝦諸子 高槻

水口へ泥ひき寄せて鯉を揚ぐ

浚ひたる池の底なる流れかな

元日の大きな耳のをとこかな

待たされて待たせて冬麗のベンチ

法楽の三鬼蔵して山眠る 伊丹

底冷の庫裏の竈の拭かれをり

埋火や繩座蒲団を勧めらる

霜柱踏んで祇王寺までの径

冬ぬくし絹糸朱き曼茶羅図

武久 昭子

浅田 光代

初雪の雪女にはなりきれず 横浜 近藤幸三郎

ドナルドダツク空から唄ふ聖夜かな

大人にはならぬと言ふ子ポインセチア

看板の蟹脚もがく十二月

凍蝶やうまく結べぬ靴の紐

一人だけの吟行と決め冬帽子 佐原

柿を挽ぐ真青な空へ枝返し

木枯をくぐりて築地寿司を食ぶ

十二月立つてる夫を使ひけり

掃除機の裏返へる技も師走かな

枯葉枯葉日当る方へ舞ひにけり さいたま

暖房の列車に聞いてをり

サイレンの集つて来る近火かな

畳替箆のうしろに五円玉

間違つてフアックス届く十二月

須藤美智子

横田 晶子